

立命といふから、一生迷子であつては少しもその所詮がない。然らばその信心決定、安心立命は如何にして得らるゝかといふに、自力、他力、聖道、淨土等の法門はあるが、それは何れにしても差別はないとして、ツマリ佛陀の精神、祖師の精神を信仰して、その信仰の通りに實踐躬行するのである。然るに不世出の偉人傑士にあらぬ限りは、兎角に佛祖の言句、行狀等に拘泥して、どこまでも佛祖の言句、行狀の通に信じて實行せねばならぬと執着し易い。茲に於いて佛祖の生命は滅死して骸骨となる。如何に佛陀聖賢でも既に骸骨となつては、凡夫愚人と毫も異なる所はない、異なる所はないと云ふても、佛陀聖賢の遺骸であつてみれば、飽くまでも崇敬するは勿論なれども、その遺骸によつて直に利益を得やうと思ふは間違つて居る。學

術は最初から眞理を發見するといふことが目的であるから、飽くまでも批評的眼孔を以て研究してゆくのは當然であるが、宗教は信を以て基本としてあるから、この信が立たなければ宗教といふものは到底成立しないのであるから、是非とも信仰の發得が大切である。しかるに今日は滔々たる多數教徒は皆迷信に陥つて居り、學者は佛法を研究せんとして、却つて疑網の中に羅籠せられて居る。かくては社會に宗教の骸骨が存在して居るといふまでにあつて、眞正の宗教、生命ある宗教の存在を見ないといふもので、誠に歎げかはしき次第である。サテ然らば如何にして眞正の信仰を發得することが出来るかといふに、外てはない、前にも云ふた通り、佛陀の精神、祖師の精神を信仰するのである。佛陀が王位を棄て、妻子眷屬を捨て、

出家苦行の結果、成佛得道の身となつて、獨り自ら利するに止らずして、五十年間諸處に奔走して横説堅説、席暖なるに暇なかつたその精神。親鸞上人が弘法の爲めに流離艱難の間に屈撓せずして、衆生濟度に身を盡くされたるその精神。道元禪師が万里の波濤を渡つて入宋し、歸朝後王侯貴顯の歸依を辭して深山幽谷に入り猿鶴を友とし、一個半個の雲水を接得して一生を送くられたるその精神は、實に廣大無邊にして、而も万古に亘りて曾て滅せぬ。親鸞上人と道元禪師は其行跡に於いても、其所説に於いても、大に相違して居るけれども、其の精神に至つては同一である。この大精神を信仰し、この精神の中に吾人の身命をも投入して、サテその上で今日吾人の運作行動をなしてゆくべきである。彼の念佛、修識、看經、燒香、禮

拜等は皆この信仰確立の上の勤行である。即ちこの信仰を相續し、圓滿ならしむる方式である。しかるに此の信仰確立せず、徒らに念佛、修識、看經、燒香、禮拜をなして、背理的、利己的福利を求めんとするは、甚しき顛倒妄想てんたうぼうじやうと謂はねばならぬ。けれども、今の學者の多くの如く、學問をして博識に誇り、戒律を守つて高潔に誇り、坐禪をして洒落を衒てうふばかりで、自己胸中に一點の信仰が無くては、決して宗教家と謂はれぬ。佛祖の行跡は時世によつて違ひ、佛祖の言説は對機によつて異なつて居る。それは現に宗派が異なつて居るのを見ても分つて居るけれども、佛祖の精神は古今を一貫して居る。この精神を信仰して、一步々々がこの精神界の運動となるべき様にとつとむるのが、佛法修行である。それであるから、先づ佛陀の歴史、

祖師の傳記を熟讀して、その大精神を領得して之を信仰することが最も肝要である。さも無くして最初からソレ念佛、看經、坐禪、禮拜と騒ぎ立て、ヤレ五時八教、開遮持犯と論量をして、根本の信仰が確立して居ないから、悉く無効となるのみならず、我慢邪見の坑に陥り、永久の禍害となる。以上今日の現状か虚儀と空理に陥つて、生命ある信仰の欠乏して居るを見て、予はどうしても、事實より抽象し來た信仰が確實であつて、而も最初に必要と認めて居るかから聊か辨したのである。

○垂示一則

今日佛教の社會に振はざる所以は種々の原因あるべしといへども、之を總括して云へば、所謂思想の革命せざるに由ると云ふべきであ

る。即ち世間は駁々として思想の進歩せるにも拘らず、僧侶は蠢々として進むが如く又退くが如くにて、半睡半醒の有様であるからである。これといふも各宗本山常路の老僧連は幕府三百年間游惰の長夢未だ醒めやらず、社會の大勢といふものが分からず、只目前の景況に眩惑して、一時を彌縫する姑息手段ばかりを執つて居て、其の内心は依然として、舊幕時代の專制政治を行ひ、一己の威福を恣にせんと思ふのみであるから、興學布教等萬般の施設が、外見は時勢に適するやうであつても、その根本の精神が間違つて居るによつて、其の結果がよからふ筈がない。彼の老僧連は外面には立派の言を吐いて、やれ人才養成とか、それ布教擴張とかといふて居るけれども、其の内心では人才を養成したいこともなく、布教を擴張したくもな

い。イヤ養成したくない、擴張したくないばかりでなく、大に人才の發達を恐れ、布教の擴張を恐れて居る。何故といふに、彼等は人才が發達すれば自己の威福を恣にするに都合が悪く、布教が盛大になれば信徒の宗教心が強くなつて、自分等の無學無識を輕蔑するやうになるから、實際のところは成るべく人才の出来ないやうに、布教の擴張せぬやうにと祈つて居るけれども、如何せん世間の有様が日進月歩で、内外から刺激せられるからシヤウコトナシに一時シノギに姑息策を執て居るばかりである。嘗て某宗の當路者と經綸上の話をした時に、某の云ふには、貴説の如く興學々々といふて、只人才を養成しやうとしても中々出来るものでない。それに我が宗の如きは無住の寺が澤山あるから、往々一ヶ寺も無住地のない

やうにせねはならぬ。それには一年に少くとも千人位の住職を出來さなくてはならぬ。しかるに學制を勵行して資格のない者は住職を許さぬといふことにすれば、此上にも無住の寺院が澤山出來て困る。それ故無學でも無識でもそんなことに關せず、僧侶を澤山に作らねはならぬと、頑然として動かなかつた。それで予は大に驚いて二の句か出なかつた。是等は所謂秦の始皇の時に彼の李斯が挾書の律をつくつて、天下の黔首を愚にし、一己の私を恣にせんとしたと同様な考である。彼等は佛教を維持するには伽藍が一番大切であると心得て居るけれども、伽藍は佛教を行ふ場所である、その行ふべき佛教が衰頹して仕舞ては何程伽藍ばかり有つても、遂に立ち腐れになつて仕舞ばかりである。しかるに此に心がつかず、肝心の佛教を維持す

べき人才即ち僧侶の教育を等閑にし、信徒の安心を鞏固けうこにすべき布教を忽とつしよ諸に付して、堂塔伽藍の事にばかり心を勞し只々勸財ばかりに力を盡くし居るとは、何たる馬鹿けたることぞや。先達而も福澤翁が云はれるには、今頃の僧侶達は佛法をどんなものかと考へて居るか一向私には解せられぬ。昔の親鸞上人や道元禪師などは、最初から本山といふ寺を建て、寺祿とか財産といふものを積んで置いて、それから宗旨を開かれたではない。宗旨を弘められたれば自然に寺も出来、淨財も聚つて來たのみではなく、その宗旨の弘まるに随つて、全國に何萬といふ寺が出来たのである。それであるから今日の僧侶達も寺院の事や財産の事に關せず、グン／＼と布教をしてゆけばよいものを、肝心の仕事を抛つて置いて枝末の伽藍や財産の事ばかりにアセツて居るとは、何たる笑止千萬の事ぞやと云つて、頻りに予に布教に力を盡すやうに勧められたか、如何にも尤の次第である。現今各宗の當路者の思想は佛教の骸骨といふべきものを裝飾して、飽くまで之を賣りつけんといふに在れば、今日青年有爲の徒は、斯る根本的思想の間違つたる者の命令、使役に服従して、一時の小榮に安せず、斷々然獨立の志氣を振ふて、佛教の精神を鼓吹すべきである。今日世間の人士は大概無宗教の徒だといふけれども、決してそうではない。實は宗教を知ぬから信ぜぬのである。從來の説教や、講義を聴いても彼等には解せない、解せないから信仰しないだけのことだ、彼等に宗教心がないのではないから、僧侶が眞實に精神的佛教を演説し、自身に實踐躬行さへすれば彼等は、決して之を信仰せぬと

いふことはない。苟も信仰さへすれば、堂塔伽藍は自然に出来る。無い處に新築の伽藍さへ出来る位であるから、從來の修繕や維持の出来ない理由はない。しかるにその出来ないのは、矢張僧侶其人が信仰を得る丈の布教をしないからである。ヨシ一方にて從來の伽藍は何程衰頹敗滅しても、その代りに新しく他方に於てよい寺が出来れば、決してさしつかへはない。イヤ社會の大勢として是非ともそうならねばならぬ。それは丁度幕府大名の城や櫓やぐらがなくなつたその代りに各地に鎮臺ちんたいが出来、藩士が廢せられて兵隊が出来、社かみし帯刀かたなが止まつて洋服洋刀となつて居る今日に、依然として六百年來の舊觀を何時までも維持しやうとすると同じことである。要するに社會の大勢は從來の舊乾坤を打破して、万般の事物を一新せず

んば止まざるよになつて居るから、將來の社會に立たんとする佛徒は、今日に於て各自銘々當時の各宗祖師たるほどの志氣を具して飽くまで舊弊を打破して、佛教の新乾坤を打出せんと期せねばならぬ。さて斯やうな志氣を抱く上は、其の行も亦之に伴はねばならぬ。即ちなるべく舊志想の輩に頤い使しせられず、飽くまで獨立無伴の行を打せねばならぬ。言論文章の上ではかりて何程大言壯語を吐いても、其の行か依然として舊習を免れぬでは何の役にも立たぬ。極言すれば、從來は僧侶といふ一種の株かぶで無學無能でも糊口には困らぬものであつたが、將來の社會は決して之を許さぬから、是れからは斯様な考をやめて、僧侶といふ一種の株で飯を食ふといふ卑劣なる念を斷ち、從來の葬祭讀經でなくとも、一種の生計を立ててゆかれるほ

どの身分となり、その上でドシ／＼布教をすれば決して成功せぬ事はない。若しこれだけの勇氣がない徒ならば、最初から僧侶にならぬがよい。ヨシなつて居ても今日から還俗するがよい。そんな薄志弱行の徒は佛教を維持することが來ぬばかりでなく、當人自身も困るだらうから、小早く見きりをつけた方がましてある。チト極端の言と思ふだらうが決してそうではない、實際の處が斯様である。能く／＼考へて修行するがよい。

○讀書の方

これは種々あるべけれども、今は予が幼少の頃よりして行ひ來りたる實驗を談せむ。予は四歳にして蒙求の標題を誦誦し、六歳にして藩學に入り、四書の句讀を受け、十三歳の時「修文館」といへる舊

藩學儒山村良行(現任島根縣師範學校の教授なり)の設立せる私塾に入りたり。館主良行といへる儒者は中々嚴重なる人にて、學生を養成する上に於いても頗る惡辣なる手段を執ることありき。さて此塾風のことは暫く措いて、學生に讀書をさするに、第一に句讀、第二に通讀、第三に對讀、第四に會讀と、以上の四種に分てり。第一の句讀は所謂素讀にて、拂曉より始めて七時八時に至つて止む。朝食後より正午迄は第二の通讀をなすことにて、通讀は、一讀して大意だけは通解の容易に出来る所の書を半日に四五十紙位つゝを自讀して、難解の處丈を記し置きて、一周に一回位質問するなり。其書は重に史傳類にて、予は史記、漢書、歴史綱鑑、資治通鑑等を、順次に平均半日に五十紙位つゝを通讀しかり。對讀は館主又は塾長若くは先輩に相對して、

自己が未讀の書に就いて研究したる處を講義して、誤謬を正して貫ひ、又は難解の處を質問するなり。此れは通讀の書よりは高等なるものにて、例へば史記を通讀する者は、國語、左傳の類を對讀するなり。而して對讀には大抵學力の匹敵せる者を二人以上四五人を一組として、對讀の際には互に質疑難問することなれば、各自敵愾の心を起して、互に負けじといふ競争するを以て、非常なる熱心を惹起し、一字一句を苟もせず、片言隻語も亂りに發せず。これを以て一回二三紙に過ぎざれども、學力の昇達することは頗る多し。第四の會讀は毎月一兩回塾生の過半は講堂に集り、抽籤を以て三五人順次に講釋して、互に問難辯論をなし、會頭之を決するなり。この中會讀はさした効力を認めさりしが、通讀と對讀とは頗る有益なる方法

たることを認めたり。通讀は大意を迅速に了解すると共に、學習したる字句熟語の練習をなし、所謂活用應用するを知り、對讀は難解の書に向つて、自己の精力を盡くして一字一句の意義をも、審議精討することなれば、大いに學力を増すなり。斯く一方に於いては、容易に了解することを得て、通讀の際自ら趣味を覺ゆる者を成るべく多く讀み、他方に於いては、少しく難解の書を刻苦して精研することはただ必要であつて、この兩方の併行は、獨り漢籍ばかりに有益であるのみならず、何の書を読むにも有益なりと認む。次に句讀なり。吾宗僧侶は從來「不立文字」などいふことを誤解したる弊習ありて、堂々たる學匠師家すら、句讀を忽諸に付し去つて、意義だに通せば句讀訓點の如きは願るに及はぬと云ふ者あり、是れ太だ謬れ

り。何となれば句讀明了ならされは、たとひ支那的に音讀するとしても意義通せず、况や訓點附にして讀むに於てをや。例せば英書を學ぶ者にして、ヒリカト句、コンマ讀の分明ならざる者が、能く文意を解するといは、誰れか其言を信せん。然らば獨り佛典に限りて句讀を忽諸に附すべき理あらず。故に何書を論せず、先づ句讀を正し訓點を明にし、音吐琅々毫も澁滯せず、然る後に通讀の際に自然に意義を明解すべし。

○讀書の眼

讀書の眼といふは文字言句の外にまで眼を放ちて、所謂眼光紙背に透ふる底の見處を言ふ。書を繙かは先づ一篇一章の大義、主意を看破し、然る後に一句一語の精微に及び、而して更に其精神を活捉せ

んことを要す。苟も然らずして初より字句を穿鑿し、典據、異說等に齷齪たらば、一章一篇の大義、主意を了する能はず、尙ほ何ぞ其の精神を活捉することを望まんや。書を讀んで其精神に通せずんば、万卷を讀み、片言隻句をも漏さずして之を記するも、只書物の蓄音器たるのみ。實用に於いて何の益するか之れあらん、無益の學、初より之を修めざるに若かず。然るに經律論の註疏を觀るに、多くは科段頗る繁雜にして、一見蛛網の如く、十字街頭の電信柱の如し。勿論此等の註疏を作りたる者の、精密に研究したるの跡は明かにして、或る點に於いては、後世の讀者を益することあるべきも、近古の經論師が之を講するや、只先輩の科段、句解節釋を蓄音器的に口演するのみ。聽者亦無意味に聽き去つて、何故に此處に科を分ち、

何故に彼處に段を立つるかに就ては、毫も心を留めず。是に於いて古人が苦心精究の餘に設けたる蛛網的科段も、遂に無用の長物に歸す。たとひ往々この科段に心を留め、古人か科段を設けたる意義を解する者あるも、國字解を以て漢書を読み、直譯を手にして英書を繙くと一般にして、一に古人の科段にのみ依頼して、敢て自ら科段を立てんとするの念なし。是を以てその書籍に對して之を講せしむれば、畧了解せるが如く觀ゆるも、一たび白本に對せんか、茫として涯際を辨せず、况して書籍を離れてはその大意たも語る能はず。故に予は出來得へくは這樣的蛛網的科段を一筆に抹殺せんことを望む、或學生は先づ白本に向つて研究せんことを望む。故心月默應老師は宗門近代の碩學なりしが、其隨徒に對して講義をなすや、必ず科段、

句讀を施したる書を以し、亦隨徒をして白本に科段、句讀を施さしめて其誤謬を正さしむ。予が今日少しく讀書眼を開き得たるは、實に良行老儒と故默應老師の賜なり

○異同と虚實

異同とは「同中異辨の眼」といへる古語あるが、同中に異なるを辨別し、異中に同あるを甄分することにて、所謂比較對照して彼此の異同を精密に甄別するの謂なり。例へば經、律、論の三藏は大體に於いて大に異なる、然れども均しく佛教なれば主意に契合する所なき能はず。又高祖の眼藏は九十餘篇、同一の文體にて同一の宗乘を拈提せらる、然れども「禮拜得髓」の卷と「轉法華」の卷と異なる所なくんばあらず。加之、眼藏中の三百則の公案は、碧巖、從容

録等諸種の書に頌古評唱せらるゝもの少からず。然るに同一公案にして碧巖に於いては之を貶し、眼藏に於いては之を褒したるものあり。是れ宗師の抑揚殺活自在なる妙手段にして、決して軌轍を以て論定すべからず。英書と漢書と國文とは、文字に於いて文法に於いて各相異なる。然れども造語、句法、さては抑揚頓挫の相一致するものあり。地理と歴史、心理と教育、倫理と哲學、各相異なる。然れども精密に研究せば雷に其互に相關連するのみならず、同一契合の處なくばあらず。此の如く觀來らば百般の學術皆相異り、而して皆相同じきの理あるを知るべし。大にしては這樣的眼孔を放ちて、百般の學術を研究し、小にしては同一文字同一語句にして、時によ

り處に隨て其意義を異にすることあり。例へば佛教の「涅槃」、儒教の「仁」等の語は種々の意義あることを辨せざるべからず。這の大の同異を辨するの眼を具せずんば、十年書を読むも只是れ盲讀のみ、次に虚實といふは、或る書は理論と事實を指す、即ち理論は虚にして事實は實なり。一書を繙けば必ずこの虚實あり。故にこの虚實を對照し、その果して偏重せざるや否を研究して書中の眞意を辨ずること肝要なり。又時としては、主客として之を用ゆることあり。例へば繪畫の陰陽に於けるが如し。主を顯はさんが爲めに客を現することあり。この際徒らに客の穿鑿に汲々として、其主を忘するが如きことあらんか、亦是れ店借の老爺に本家を奪はるるものなり。

○學問の消化

學問の要は活用に在ると固より論を俟たず、而して學問の活用は學問の消化にあり。百般の書を読み、諸種の學術を修むるは、只その學說を記持して忘失せず、時々人前に向つて之を舌頭より演出し、若くは筆頭より記述するのみならば、世に學問ほど馬鹿らしきものはなし。學問は古人の糟粕、古人が人生といへる旅行の日記に過ぎず。故に一生他人の糟粕を喫し、他人の旅行日記を記誦したりとて、自己に於いて何の益する所ぞ。故に古人の說、古人の論を把つて、自己聖體長養の資に供せんことを要すべし。苟も此に心を留めずして學問をなさば、讀書万卷遂に學問の病人となり了らん、即ち學問の爲めに自己の靈智を埋没せられたらん。譬へば飲食は身軀の營養の爲めになすものなるに、徒らに口舌の美を貪り、節度を忘れて猥

りに飲食せば、遂に食傷して腸胃を害せんのみ、豈亦愚ならずや。故にこの消化力の弱き者は始めより其力に應じて學問すべし。然らざれば學問の爲めに一生を誤り、却て最初より無學の輩に劣ること萬々なり。曩祖が「不立文字」等の教を立つるも、みな此病に陥らざらしめんが爲めなり。本來宗教家は單に博學宏識を尙ぶべきにあらず、その學問をなすは宗教家なる資格を具へんが爲めなり。然るに俱舍、唯識、華嚴さては碧巖、正法眼藏を修めたるが爲めに、人間の常識までも沒了し去らば果して何の益かあらん。勿論衲僧は常識以上に卓越する所なかるべからざるも、眼藏、法華以外には何等の事理をも解する能はざるに至つては、其能く眼藏、碧巖を解せるといふものも、斷じて眞正の解了にあらず、一種の寐語たるのみ。

予は吾が學林より這種の病人が輩出せざらんことを望む。

○參問の利益

宗師老匠に參問の必要なる事は、高祖、學道用心集等に既に懇示せり。單に其人の學說を知らんとならば、其人の著書を解することを得は、特に其人に就いて講義提唱、若くは演說法話等を聽くの必要なし。然れども世人が其人の口演筆記等を誦讀するに満足せずして、直接に其人に面接せんことを求むるものは何ぞや。其言語風采より得る所多くして、著書、筆記等に於いて遂に求むべからざるものあればなり。即ち其人に面接すれば、個人的薰化を受くること少からざればなり。吾宗が古來面授面稟を尙び、以心傳心を貴ぶは論なし、遍參行脚して宗師學匠に隨侍して、灑掃炊煮の勞を辭せざるものは、

只その學識を開闡せんが爲めのみならず、亦其人の個人的薰化を受けんことを求むるなり。然るに近來學林の設立せられてより、教師、學監なる者は、學生視て以て雇人の思ひをなし、教師、學監亦學生を視ること恰も囚徒の如し。是に於いてか學生はイヤ／＼ながらに教師の講筵に列し、イヤ／＼ながらに學監の指揮に服す、かくて教師もイヤ／＼ながらに提唱し、學監もイヤ／＼ながらに奉職することなれば、此間に於いて毫も親密の情誼を見ず、尙ほ何ぞ個人的薰化を望まんや。予嘗て鐵舟、泥舟等の揮毫を請はんが爲めに彼等に面會せり。而して彼等の面晤により、より多く得る所ありたり。又嘗て慶應義塾に在りて英書を學ぶ、而して福澤翁に面晤したるは卒業以後なりき。當時予謂へらく福澤は拜金宗の開祖なり、我英書を學ぶ

も、焉ぞ彼を學ばんやと。既にして膝を交へて面晤するに及んで、大いに從來の非を知り、その面晤の遲きを恨みたり。爾來面晤する僅かに數回、予に得る所少ならず。嗚呼今や則ち亡し、復た快活宏達の談を聽くを得ず。予嘗て高等中學林に在りし時、山端息耕といへる少年^{あり}、操行方正にして能く學を勤む、朝夕予が室に出入して質問をなして怠らず。獨り予に參問するのみならず、暇日は必ず校外各所の學匠名士等に謁して益を請へり。亦參學の方を知ると謂ふべし。おもふに此人將來必ず有爲の士とならん。冀くは學生諸子。徒らにブック、ノーレッヂを得るに汲々たらずして、名匠碩學に參問し、その言語風采、威儀態度より得べき眞正の法益を獲得せよ、然らずんば卿等は遂に死學者たらんのみ。

附 錄

森田禪師垂示

○臘八法話

(三十二年十二月八日
福田會に於いて)

「始めてしる衆生本來成佛なることを」と、是れは『圓覺經』であると思ふ。サテ「居志を移し養體を遷す」といふことがあつて、山僧も久しく諸方に巡化して居つて、漸く近日に至つて歸京した處が、風邪で休んで居たことであるが、若い雲水の時は一祖三佛教會などの法要のことは、十日も以前より能く心得て居たものであるに、近來の様に多忙であるといふ打ち忘れて居て、今朝に至て成道會といふことを知つて讀經して來たやうな次第であるから、何でも人は居處と養方が肝要である。此處の福田會にも澤山の佛があるが、(育兒のことをいふ)これは皆不仕合なもので、父母のないものや、有つて

も養育の出来ぬ者のみであるから不惑といふべきや。『心地観經』の中にも「父母の長命するはその子にとつては富貴の一部分であり、幼にして父母を失ふは貧乏の一部分じや」と、佛も仰せられてある位であるから、此處の幼兒等は勿論不仕合なものに相違ない。併し苟も性靈を具へて居るものは、見養ひやふにて如何様にもなれば、此の幼兒等も養育の仕方によつて皆佛になれる。昔しから聖人高僧の人を觀るに、逆境に立つて苦辛した人が、却つて大業を成し後世に至つて尊敬せらるゝものが多い。尊釋も淨飯王の一子と御誕生あつたれば、富貴の上よりは申分ないか、母公は御誕生間もなく御崩れになつた。高祖承陽大師も久我内大臣の家に御生れあつたから、是亦我が朝にては人臣の極で榮華の位置に相違ない。然れども三歳にて御父公

を失ひ、八歳にして御母公おんはくまに分れ給ひたから矢張不幸に相違ない。しかし釋尊も高祖も富貴榮華の家に御生れ遊ばされながら、斯く父母に早く御分れなされ、即ち逆境に逢ひ給ふたによつて、菩提心も起り佛祖と御成遊ばされたのであるから、逆境に逢ふのが却てよいこともある。自分の事を自分がいふはチト異なるものであるが、若い坊さんが居るから（高等中學林生徒をいふ）山僧の事を話して聞かさう。山僧の生れは卑賤であつて、固より釋尊や高祖の比たぐひではない。併し父母は八九十歳まで長命したから、此の方からいへば富貴の一分を占めたといふてよいが、その代りにその外の事では随分に貧乏難儀をいたした。大躰父母の許さぬに自ら好んで出家し、七歳より十四歳まで師匠の手許で養育せられたが、十四歳の時に師匠が遷化

せられた。ところが弟子兄弟が七八人もあるので入らぬもの同様に、誰れあつて世話する者はない。さればと云つて父母の許しかぬるを、自ら無理に出家したと故、今更父母に世話をして呉れといふわけにもゆかず、遂に雲水行脚あんぎやくに出かけたが十六歳の時、兄弟子の處に行つて飯炊を二年ばかり致して居て、十八歳の時七八人の雲水と共に東京より七八里在の或る衆僧を世話する和尚の處に來た。その頃奕堂禪師といふがあつた。此の方は行誠上人と氣が合ふたといふ位であつたから、随分異つて居た智識で、此頃の人でも大抵知らぬものないが、山僧はその後この奕堂禪師に隨身して加賀の天徳院に前後十八年居た。その間に澤山の雲水が居るとであるからその雲水達の師匠の許より、堂奕禪師の處へ、自分の弟子は箇様くで有つたか

ら何分嚴重に仕立を頼むとか、不一方世話になるので難有とかいふて、毎度弟子の事に付て手紙が來る。スルト舊く隨身して居ること故に、山僧は奕堂禪師の左右に仕へて居たに依つて、禪師から時々その手紙を出して見せられた。その中に師匠が弟子のことについて心配するさまが涙の出るやふな事が幾らもあるにつけ、自分も師匠でもあつたならば、間には禮狀の一本も禪師に呉れるであらふにと思ふたことも度々あつた。併大徳寺の開山が「口あつて食はずといふことなく、肩あつて衣すといふことなし」といはれた通、誰一人世話するものもなく始終貧困で逆境にばかり逢ふて居たが、それでもドウヤラ、コウヤラして飢もせず凍えもせず今日に至つたから、山僧は始終逆境に逢ふたのが却て仕合となつたと思ふ居る。右川縣の

官吏某といふは子供七人あり、二人の娘も既に嫁した、三人の男子も學士となつて居るから、先づ以て富貴圓滿といふてよい。然るに先年一人の息子が帝國大學に在るとき、ランプが顛覆して火の爲めに焼死で仕まつた。ソレから母の里が非常に零落したので、この方を世話せねばならぬことになつたといふ。釋尊も此の世は「缺陷世界」と仰せられて、決して満足ばかりといふ事はない。此の某も此の息子の死んだりした事が却て菩提の種となつたのじや。ソレであるから不足の方が世話の仕様で却つてよくなるから、幼兒も若い坊さん達も決して不足を歎げかぬがよい。

今年は内地雜居も實施せられて追々外人も内地に入り込んで來るのであるが、外人じやとて一概に敵視せず成るべく懇切に附合するが

よい。佛の教は慈悲が肝要であるから、併し「和而不流」といふことがあつたから何でも平でも外人と同様にせねばならぬといふことはない。日本には日本の習慣風俗といふものがあるから、それは何時迄も守つてゆかねばならぬから、小供衆達に能く教へて置いて貰はねばならぬ。惠愛部の方々は重に家内の事を取締る人々達であるから、不斷家の内に在つて能く氣をつけて、小供や孫達を教へて、神や佛に手を合せて拜むことを習はし置いて貰はにやならぬ。ソウでないといふと年寄て不孝の子や孫に苦められるやふな事になる。日本の佛法も徳川氏前までは上下共に行はれて居たが、徳川氏の初の頃より儒教を以て中等以上の人に仁義忠孝の事を教へたものだから、神佛を拜むといふやふの事は下流の者にばかり殘つて、中流以上即ち士

大夫以上では合掌禮拜するといふやふな事をするのは、何となくキマリが悪いといふ風になつた處に、維新からこのかた西洋々々といふので一層をふいふ事をせぬやふになつた。併し西洋人といつても一概には云はれぬ。能く物を心得た者は神佛を敬禮せぬことはない。先年十年も法律の顧問に雇れて來て居つたポアソナードといふ佛蘭西人が、満期になつて歸國する時に、明治會堂で離別の演説をしたそうだが、その折に日本の青年に申し置くことがある。ソレは外ではない、自分は十年も日本に居たが、その間神社佛閣といふやふな處の前を過ぐるときは、必ず帽子を脱いで敬禮して通つた。然るに日本の青年達は此の敬禮を爲ない様に見受けるが、此れは甚だよろしくない事であるから、向後はドウゾこの敬禮を缺かぬやふにして

貰たいと懇々と頼んで歸つたそうだ。ソレから先年露國の皇族が來朝の時高輪の泉岳寺と芝の増上寺に參詣せられたが、泉岳寺は門の内までは馬車を乗り込んでもよいのに、皇族は國民の敬禮する場處であるからといふので、門の前から馬車を下り帽子を脱いで入り、降りも門の外まで帽子を着^きずして出られた、増上寺もその通であつたといふ。先日伊藤侯爵一行が永平寺に參詣の時も、祝聖と申して、天皇陛下の聖壽無窮を祈禱する法要をした後で一同皆焼香せられた、斯様に心得た人は國民の敬禮すべき場處ではチャント敬禮を缺かないが、生意氣に鼻髭をハヤして居る連中は、何となくキマリが悪いと云ふやふな感念があつてならぬ。これも習慣である、小供の時から習はして置かぬと成人してかういふ風になる。同じ佛法であ

るけれども、眞宗とか日蓮宗とかいふ宗旨は、昔しから大名の保護を受けず、御朱印とか御墨附とかいふ者を貰ふて居ない。又寺の田地といふものも持たないから、其の代りに布教に熱心にして、信施を以て立て居たが、外の宗旨では大名等の保護を特みにして、一向に信徒に布教をしなかつたから、御維新といふ大地震に逢ふて、大騒をして本堂を毀すやら庫裏を賣るやら、畠に桑や茶を植えるやら、甚しきは還俗して仕舞つた者も澤山あつた。然るに従來大名等の世話にならなかつた眞宗や日蓮宗は少しも驚かない。一向平氣でズンズン布教をして決して困らない。かういふ有様であるから、眞宗の門徒の者は信仰心が固く、一家の中でも主人始め小供に至るまで、朝起ると直ぐに佛壇に向つて如來様に手を合せて御念佛を申し、夜寐

るときもその通にて決して怠らぬ。コレは小供の時から親達が自分でチャンと行つて見せて小供に教へるからである。人間も草木の様なもので、幼少の時は如何様にもなるものであるから、何でも小供の時の仕付が肝心である。追々外人が入り込んで来て、色々の事を見たり聞たりする中に、知らず日本の國民が爲すべき敬禮も忘れるやふになるから、何でも今から用心して小供を善い方に仕付けて貰はにやならぬ。兎に角眞宗の遣方が一番よいから、彼の風に遣つてもらいたいものじゃ。金澤の小野太三郎といふは金澤第一の慈善家であつて、十四五年前に既に藍綬褒章を賜つて居る者であるが、此の人が養育院の様なもの遣つて居る。これは近來遣り始めたのでなく、維新以前から遣つて居るのである、その僻財産家といふわけ

でもないが、生來恵み深い性質であるのじや。維新以前は加賀侯の御長屋物といつて士族分でなく、漸く脇差一本しか差せない位なもので、殿の料理番の處に出て使はれて居るのであつた。大名の召上り物が出来るといふになれば、鮎が五升入つた、牡丹餅が六升入つたといふが、その様に殿様一人で食はれるわけではないけれども、相伴人が多いのである。ソレから料理番などは空辨當箱からべんたうばこを持って出て、歸りには中に一杯物を入れて戻つてくるといふ位であるから、鮎でも牡丹餅でもソノやうに澤山入つたものであるが、此の太三郎といふ男は一杯ツメた辨當箱を持つて出るが、ツイに中に物を入れて歸つたことはなく、何時でも空からであつたといふほどな人物であつて、生得人を恵むことが好きで、貧乏人に衣服が無くて難儀する者があ

れば、自分の古着をソット持つてゆきてやり、食物に不自由して居れば食物を持つてゆきて遣る。ソレモ人の知らぬやふに夜遅くなつてソット持つてゆきて遣るのである。この人が女房を三人換えたといふが、どうしたのかといふと、前の二人は亭主が人に物を恵むに、自分は食はず衣ずにも遣りたいといふのであるから、ソナナ人はイヤだといふから換えたそうだが、三人目の女房は至つて慈悲深いもので、能く亭主の氣をとり、共に心を合せて慈善を遣つて居たが、初めは人も知らなかつたのが、巡查とかいふやふな人が市中を巡るやうになつてから、御上に知れたので、太三郎は縣廳から呼び出しによつて賞勳局より褒章を賜はつて驚いた位であつたといふ。しかるに先般その女房が亡くなつたといふが、誠に惜いことである。太

三郎の事が追々世間に知れわたり、大阪とやらから其の養育院の株を譲つて呉れぬかと申し込んだものがあるといふことじやが、是れはキツト儲主義からのことであらうが、金澤の人達もよもやソノナ人の手に渡しはせまいと思ふ。兎に角此人達のは眞の慈善である。眞の慈善といふものは財産家でなくても出来る。此處に列席の惠愛部の方々は、皆衣食に不自由な人はないから、仕様と思へばドンナにも出来る。初めに讀み上げた『圓覺經』にも衆生本來成佛とあつて、これは佛の境界になつて見ないと分らぬが、兎に角養躰を遷すで、養様で如何にも成れるのであるから、御自分の小供や孫は勿論、此處の佛達にも精々惠みをかけて遣つて追々佛を澤山に仕立て、益々盛大にして貰ふやうに呉々も願つて置きます。

○長生法

(明治卅六年一月十日
九日禪師古稀誕辰)

いづれも夫れく結構なる祝偈祝文に預つて、誠に満足に存ずる。今日は衛生の事が段々進み、躰育の法も發達して、各學林とも躰操運動などを行ふことだから、昔しとは違ふて病氣といふことが自然少ないであらう。しかし山僧が今日のやうに衛生、躰育學の事に餘り氣を注げぬ時代に生れて、今日まで壯健で長命をしたのは、聊かその原因ともいふべきことがあるやうに思ふ。山僧の授業師といふ人は、なか／＼躰格のよい方であつたが、その食事は割合に少なく、大衆と共に飯臺ばんたいに就かれた時は、應量器おつりやうきに一杯で仕舞ひ、決して再進しん(二杯)を受けられず、又寮内にて鉢頭ぼつづで行粥の時は二杯きりにて三杯とはかへられなかつた。七歳の時から十四歳迄かやうな人の許

に育てられ、授業師が遷化の後雲水行脚の身となつたが、間もなく奕堂和尚の許に赴き前後十八年間隨身して居た。奕堂和尚は身丈も高く膂力も強く、作務の時は並の雲水二人分丈は慥かに出来たのであつた。それでも食事は至つて少量で、飯臺の時は應量器で再進をせられず、寮内では頭鉢で二杯きりであつた。山僧も授業師の許を離れた當分は、動もすれば少しく珍味があれば必ず分量を過ぎすぎがあつて、それが爲めに腸胃を損することがあつて困つて居たが、奕堂和尚の少食にして而も大力でよく働かれることを見ると、少食でも身體を損するとはないものであるといふことを合點したから、その後はつとめて食事に注意をした。かやうに授業師も隨身をした師家も共に少食であつて、しかも壯健であるところを見て、自然に

自分が習ふて、食事に注意して度を過ぎぬやうに致したから、今日迄餘り身體を損することなしにやつて來たのであらうと思ふ。古人も口は禍の門といふて、尤も慎まなければならぬことである。今日の醫師の説を聽いてみても、衛生とか攝生とかいふ中に、その重なるは食事であつて、大抵の病は食事から起るのであるから、衛生といふことに就いて、尤も大切なのは食事である、この食事の度量さへ氣をつけて、その分に應じて過ぎぬやうにしてゆけば、大抵の病氣は起らぬ。ツマリ何事も十分は溢れるといふてよろしくないが、とりわけ食事は十分にすべきでない、ドンナ甘い物でも十分に食ふのはよろしくないから、常に八分だけにして二分は残して居るのがよろしい。これは鳥獸で長壽するものは皆さうであるといふから、人

間もその理に違はぬものと思ふて居る。折角學問をしても中途で病身になつたり、不幸にして天死わかじけをしては誠に残念千萬なることであるから、随分朝夕氣を注げて身體を損せぬやうに辨道せられるやうに、呉々も頼んで置く。

西有禪師垂示

○身心脱落

(明治三十六年一月十一日 第一學林開林式に於いて)

高祖(承陽大師)は「身心脱落々々身心」と仰せられてあるが、これは實に宗門の眼目たる御言葉であつて、宗門の一切萬事は悉く此眼目に違はぬやうに行はれねばならぬ。イヤこれは我宗ばかりでなく、各宗の祖師にしても、一人として身心脱落なさらぬ御方はないのぢや。サテ近來は頻りに普通學くといふて、この學林などもその爲めに

新に建築せられて、斯く立派に出來上つたのは誠に結構であるが、普通學といふは世間普通の學問といふことであつて、何も今日になつて始めて僧侶が修めねばならぬやうになつたのでない、昔しからそうである。その證據には何宗の祖師でも、當時の普通學に達せない御方は一人もない。それはその筈である。世間普通の學問にさへ通じないやうなことは、どうして世間一般の人の上に立つて化導してゆくことが出來やうぞ。であるから出世間の僧侶が世間普通の學問に達しなければならぬといふことは申すまでもないことではあるが、その普通學を修めるに就いて、この身心脱落といふことが最も必要ぢや。身心脱落といへば如何にも六ヶ敷いことで、佛や祖師でなければ決して出來ぬやうに思ふ者もあらうが、決してさうでは

ない。あまり遠方に見ると大いに間違うが、手近く見てゆけば決して我々にでも出来ぬことはない。サテこの我々の身心ぢやが、これは一つの機械で、機械にしては如何にも巧みに出来て居るもので、凡そ天地間にこの位に靈妙な機械はない。その靈妙な機械を上手に使ふと下手に使ふとによつて、聖人と凡夫との區別が出来てくるのである。この機械を上手に使へば、我々の凡體が直に轉じて聖體となる。であるからこの機械を上手に使うといふことが肝要である。しかるにこの機械には遺傳病があるから、其の遺傳病の根源を斷ち截つて仕舞はぬと、大切の機械を上手に働かすことが出来ぬばかりではなく、遂に打ち壊して仕舞うやうなことになる。しからばその遺傳病といふはどんな物かといふに、先づ、貪、瞋、癡、それに我見我慢

といふやうなものぢや。貪はムサボルといふて貪欲のことぢや。自分の氣に入つたものはナンボウでも欲しいので、これは甘からといふて腹に溢れるほど食ひ、これは好きだといふて何程でも取り込むのが貪欲ぢや。甘いからといふて食物をムチャクチャに詰め込めば、腸胃を損じて大病となり、遂には五十年使へるこの機械を、三十年か四十年しか使はずに打ち壊して仕舞うやうになる。それから瞋はイカルと讀んで、自分の氣に入らぬことに出遇ふて腹を立て、遂に人と喧嘩をしたりして、トンダ禍を蒙るやうなことになる。癡は愚癡といふことで、物の是非善惡が分らぬことぢや。畢竟この愚癡で物の道理が分らぬからして、貪欲も起り腹も立つのであるから、貪、瞋、癡の三毒といふ中にも、この愚癡が一番の根本ぢや。それ

から貪欲などの病がないにしても、我見我慢があつては未だ無病健全な人とはいはれぬ。山僧も今年で八十三年間この機械を使ふて来たが、若い中は疝癢かんしゃくも時々起つて、小僧共の頭あたまも張りコカシなどして、中々く腹を立てぬといふわけにゆかなかつたが、近來は年が寄つて大分そのやうなことも少なくなつた。ソコデこの遺傳病の根源を斷ち截つて仕舞はねば、何程學問をしても、それをこの身心で上手に使ふことが出来ぬから、何の役やくにも立たぬ。役に立たぬばかりではなく、ドウカすると學問の爲めに却つて靈妙な機械を打ち壊するやうなことになる。「身心脱落」といふことは、この身軀や精神を亡なくならずといふことではなく、この病源を斷ち截つて仕舞うことである。それであるから、開山も「委することなうして脱落す」と仰せられてある。身心を脱落して仕舞つて始めて佛祖の働きが出る、そこを「脱落身心」といふのぢや。サテ時勢じせうに順ふといふことは誠に必要なことであつて、歴代の佛祖もみな時勢に隨ふて教化なされたればこそ、衆生を御濟度なされたれ、苟も時勢に逆らふてゆつたことなれば、決して衆生濟度は出来ぬ。そこで時勢じせうに順ふといふは如何にも必要であるけれども、時弊じへいに陥らぬやうに氣をつけねばならぬ。時勢の變化につれて種々善い事も起つて来るが、その代りに悪い事も出来てくる。一利一害は數の免れぬところであるから、時勢に順ふといふことは少しも忘れてはならぬが、それと同時に時弊に陥らぬやうにするといふことも忘れてはならぬ。今日世間の普通學を修めるといふのも、ツマリ時勢じせうに順ふのであるが、その

と仰せられてある。身心を脱落して仕舞つて始めて佛祖の働きが出る、そこを「脱落身心」といふのぢや。サテ時勢じせうに順ふといふことは誠に必要なことであつて、歴代の佛祖もみな時勢に隨ふて教化なされたればこそ、衆生を御濟度なされたれ、苟も時勢に逆らふてゆつたことなれば、決して衆生濟度は出来ぬ。そこで時勢じせうに順ふといふは如何にも必要であるけれども、時弊じへいに陥らぬやうに氣をつけねばならぬ。時勢の變化につれて種々善い事も起つて来るが、その代りに悪い事も出来てくる。一利一害は數の免れぬところであるから、時勢に順ふといふことは少しも忘れてはならぬが、それと同時に時弊に陥らぬやうにするといふことも忘れてはならぬ。今日世間の普通學を修めるといふのも、ツマリ時勢じせうに順ふのであるが、その

普通學を修めるに就いて、時弊に陥らぬやうにしてゆかねば、アツタラ靈妙な機械をメチャ／＼にして仕舞うやうになる。この我々の靈妙な機械には、先きに申したやうな天然の遺傳病があるのぢやから、それを學問の力で斷ち截つて、充分健全なものにして上手に使うてゆかねばならぬ。どうぞ開山の仰せられた「身心脱落」といふことを、餘り遠方に見ずに手近く見て、何んでも精を出して學問を修め、その力で身心を脱落し、更に「脱落身心」の境界に到つて、充分に世の爲め、人の爲めに働いて、眞實佛祖の兒孫たるに負かぬやう吳々も頼み置くことである。

○衲僧の氣骨

余は過日總持寺貫首穆山禪師に謁したが、五寒中八十三の高齡とは

いはれぬほどに壯健で、辯論滔々として氣燄當るべからざるものであつた。その時の話は大いに警戒となすべきものと思ふから、聊かその大要を記さう。それはかうである。衲僧は自ら一種の氣骨がなくてはならぬ。この氣骨がなくては何程才があつても、學問があつても、決して役に立たぬ。サテその氣骨といふものは、何から出来るかといへば、信仰、信念である、すなはち自信力である。近頃は世間で頻りに迷信／＼と云ふて、信仰、信念を排斥するやうであるが、如何にも信仰、信念といふことにも種々ある。そして盲目千人の世の中であるから、迷信者の多いといふことは當然である。これは何れの時代でも皆ソウであるので、決して今日に始まつたわけではない。何れの時代でも、眞實悟信の者といふは幾人もあるもので

はない。世の中にはイツモ迷信者が多いからこそ、歴代の佛祖聖賢が様々に骨を折つて化導なされ、迷信者がないなれば、骨を折つて化導する必要はないのじや。凡夫は固より迷信に相違ないが、それを只迷信であるといふて、一概に排斥して仕舞つたばかりでは、丸るキリの無信といふことになる、ソコデその迷信を導いて正信に赴かせるのが宗教家の役である。然るに此頃の矢鱈に迷信くくと矢釜敷排斥する連中は、自分は果して正信、悟信を得て居るかといふに、ドウモ怪しいものじや。西洋の學者の誰れは斯う言ふて居る、彼の書には斯ふ説いてある、イヤ此の説は事實に相違して居る、彼の論はチト疑はしい、といふやうに他人の説や論を記憶し或は批評はするが、然らば自分の信する所はといふと、更に定まつて居ない。そ

れでは自分は丸るキリ無信じや。今日の佛法信者といふものゝ中で、俗人の多くは申すまでもなく、坊主も共に皮相、外形を以て佛法と思ふて居るのじやから、實際はいづれも迷信に違ひないけれども、迷信でもなんでも、兎に角一種の信仰は持つて居るが、彼の迷信呼ばりする連中の多くは、丸るキリの無信じやないか。自分が無信でありながら、人の迷信であるといふて、一概に排斥して無信にして仕舞うとするのはドウいふわけじや。今日はそれでも世の中が稍秩序が整うて来て、宗教宣布の上に就いても、大いに都合がよいが、山僧等が若い時には、御一新といふ大地震が揺つたものだから、中々の大騒動であつて、坊主の中でも様々狼狽たものが澤山あつた。彼等は畢竟自信といふものは無かつたから、あんなに周章て、倒れ

たのじや。御一新早々神官僧侶合併教院の時、故環溪和尚は佛教各宗派の總裁で、神道の方では有馬某であつたが、その時政府から「俗服勝手たるべし」といふ觸れが出た。スルト種々の説が起つて、僧侶は法衣を止めて羽織袴を着にやならぬといふことになつて、それが議案といふやうなものになつて出た。その時山僧は禪三派の議員として出て居つたから、その議案様のものに附箋をして「勝手たるべし」とあるからは、矢張從來通りに法衣を着るがよい、何にも羽織袴を着るに及ばぬと云つて廻した。スルト山實辨といふ人が一人山僧の説に賛成した。いよく總裁の手許に廻つて來た時、環溪和尚は、コレはどうしたものであらうと、神道總裁に相談すると、スレハ君等の方のことであるから君が裁決せられるがよいといふ。ス

ルト環溪和尚は、イヤそうでない。裁斷といふものは局外者が公平なものである、コレは私等の方の事であるから、君に相談するのであるといはれたによつて、神道總裁は、然らば申さう。拙者は西有穆山氏の説が至極よいと思ふ。何にも政府から是非とも服を改めよと命令したのでない、只俗服を着てもよいといふまでであるから、從來の法服を着たいものは着て差しつかひないといふことにした方がよいと申したから、遂に法服廢止論は止まつて仕舞つた。それから一時羽織袴を着て居た者も、何時の間にか追ひくに再び法衣を着るやうになつた。その時は山僧も四十前後であつたから、随分盛んに氣燄も吐いたことであつたが、ツイに今日までそれで遣り通して來たのじや。兎に角袴僧は一種の氣骨を具へて居て、それで以

て世間を導かねばならぬ。しかるに今日の若い者のやうに、矢鱈に世間の風潮を追ひ廻つては、決して世間を化導することは出来ぬ。元來宗教といふものは、議論や理屈ばかりでゆくものでない、確固不拔の信念が肝要である。古から幾多の高僧偉人が宗教を改革し、或は一新派を起されたのは、皆この堅固な信力である。然るに今日の若いもののやうに、人の事を迷信く〜と排斥しなから、自分は無信仰であるといふでは、全く世の中を無信仰にして仕舞うといふ話じや。さなきだに世間は追ひく〜物質的の慾望が高まるに連れて、次第に信仰心が薄らいでゆくのに、僧侶自身までか自分に無信仰であつて、その上に迷信く〜と矢鱈に排斥するやうでは、「民信なくんば國立たす」といふことになる。幸に迷信でもなんでも幾らか

信仰がある中に、それを釋よく導くことをせねばならぬ。それにはこの氣骨が一番であるが、その氣骨は先づ信仰が肝要であるから、何んでも注意して若い者を育て、貫ひたいものじや。

福澤翁宗教談

○活布教

予は少年の時に慶應義塾に居つたが、福澤翁に遇ふて話をしたのは、卒業後の事であつて、在塾中に別に翁から教授を受けたこともなく、又その後もさまざま親炙しんしやくしたといふでもないが、初めて面會した時に、殆ど二時間ばかりも佛教界振策のことに就いて、諄々として自分の意見を陳べられた。其の後一昨年病氣の見舞に往つた節も、三時間餘も同様に宗教界の革新意見を吐かれ、遂に釋宗演と共に自宅に招

かれて、一席の法話を家内衆達に致したこともある。それから昨年夏期休暇に際して歸郷するまでは、折々訪問をしたが、其の度毎に談の宗教界の事に及ばなかつたことはない。かういふ有様であつたから翁が宗教革進の希望があつたことは慥であるが、只近來になつてからではなく、眞宗の小栗栖香頂をぐりすかうてうや故寺田福壽などを招いて度々自宅で法話を乞ふたこともある位であるから、宗教の必要は疾うから認めて居られたに相違はない。又翁が佛教及び僧侶に因縁のあることは、『福翁自傳』の中に、翁の父が翁を坊主にしようといふ考があつたといひ、又長崎で某寺の若徒をして年頭の廻禮に附いて歩らせたといふ事などがあるのを見ても知れる。それから『修身要領』の出来た時も特に手書を以て博多万行寺にしかたの七里恒順老僧に贈られた

事などを見ても、佛教并に僧侶を破滅しやうなどといふ考は、毛頭無かつたといふ事が分る。しかしながら翁が數十年來佛教及び僧侶に對して、口を極めて罵倒ののたましたことは藏かくれもない事實である、けれども之を以て直ちに翁が佛教破滅主義を執つて居つたとは謂はれぬ。何故といふに、翁は如法の僧侶でさへあれば、其の人に對して決して輕蔑するといふやうな事がないのみならず、之を崇敬し或は其の人を保護する位であつた。その極力罵倒したのは、佛教其物、僧侶其物を破滅させるのではなく、佛教の腐敗したる部分、僧侶の墮落したる徒輩を排撃して、醇粹じゆんすいなる僧侶を打出し、眞正の佛教を發揚せんと考であつた。翁が罵倒は獨り佛教や僧侶に限らず、維新えいしん匆々そつそつに楠公は權助が首縊つたと同様であるなどいふ、破天荒はてんこうの語を吐い

て天下の耳目を驚かせたなどを始めとして、數十年少しも遠慮せずして、社會のあらゆる方面に向て、痛罵つらばを逞つらばふして顧みなつかたのは、所謂撥亂反正はつらんはんせいの考であつたのである。試に當時武士とか學者とか稱する輩の狀態を顧みよ、「ぶしは喰はねどたか楊枝」などいふ諺を、最上の格言と思ふて、金錢を瓦礫の如くに思ひ、一擲千金といふやうな事を、英雄の本分と誤り、頑冥なる鎖國主義を以て、忠君愛國となして、その實は自家の生計にすら困む位でありながら、口を開けば天下國家の經綸がどうのこうのと言ひ散らして居たてないか。斯る狀態で、自分一身の糊口にはさへ困まる様では、どうして社會國家の經綸が出来やうぞ。僧侶も神官も武士も學者も、滔々たる天下悉く斯る狀態であつたから、これではいかんと思ふて、サテこそ米

國の個人主義、實利主義を鼓吹こすいして、天下を掃蕩したのである。勿論この主義を鼓吹するに就いては、極端なる言論を吐いたには違ひない。彼の楠公と權助の比較の如きは、固より極端の言であることは、翁自身も能く知つて居るに違ひない、違ひないと知りながら、猶ほ之を吐くといふのは、斯る時勢には此の位に極端に出てなければ、其効能がないからである。總じて一方に曲つたる物を矯正しやうとするには、中央の處まで引き矯ためても、眞直まっすぐになるものではないから、是非とも他の一方へ曲げ附けねばならぬ。丁度達磨りやうだまが梁武りやうぶに對して「廓然無聖」無功德」と云ひ、丹霞たんかが木佛しゆを燒いて尻しりを炙あぶり、大慧たいえが其の師圓悟えんごの『碧巖錄』の版本を一炬に附して燒いたと同じやうなわけである。總じて物に絶體的の善といふことはない、一利

あれば一害は免れぬ。まして維新の大革命の際に當つて、從來數百年のあらゆる舊事物を破壊し、あらゆる舊思想を掃蕩して、嶄新堅固なる新天地を打開せんといふ勢で遣つたのであるから、極端なる言論があるのは、固より當然のことで、少しも怪しむには足らぬ。しかるに翁を以て「拜金宗」の元祖と稱し、如何にも黃白の奴隸の如くに云ふ輩があるは、これこそ如何にも酷評である。翁は只從來の如く、藩主から當扶持を貰ふて、僅に生計を立て一家を維持してゆくやうな、卑屈な依頼心ではゆかぬ。當時の士大夫と稱する輩のやうでは、如何に名論卓説を抱いて居ても、その主君とかいふ者の意に叶はなければ、自分の祿をとり上げられるから、シヨウことなしに自説を枉げて居らねばならぬ。かゝる卑劣な根性ではどうして

宇内の大勢に驅られて、一大革命に遇ふた我が國を、獨立堅固の新日本にする事が出来るものぞ、是れは一番個人の自立から遣らなければならぬと考へ、サテこそ「獨立自尊」といふ主義を鼓吹し、社會實利主義を唱道したのである。その事は翁自身も毎度人に對して云ひ、又翁の自傳を讀んでも分る。決して今日の學士政客が只口で清廉を唱ひながら、暮夜黃白を受けて、其の節を二三にするが如き卑劣漢とは同日に論すべからずだ。翁は人に對し世に向つては、金錢の貴ぶべきことを説くから、如何にも金錢を貪るが如くに見ゆるけれども、實際翁の行操を見るときは、それこそ眞に封建時代の清廉なる武士氣質であることが分る。しかし翁は自らも嘗て所謂理想的の賢者とか君子とかを以て任じて居られなかつた。それは翁が自

ら「三十一谷人」(俗世)といふ號をつけて居るのを見ても知れる。翁は嘗て予に云はれるには、予は固より俗人、眞の俗人であるから六十年來俗人の仕事をして、世の中の人をも眞の俗人にしたいと世話もした。しかし外面に賢人君子を装ふて、内心は土百姓素町人すぢやうじんよりも卑劣なる、所謂偽賢人偽君子は大いに嫌いだ。ソコデ予は俗人であるから、俗界の教導は爲て來たが、宗教道德の方はどうてもよいかといふに、決してそうではない。今日は一方には物質的知識は大分發達して來たけれども、一方に於いて放火、劫盜、詐欺、謀殺等の罪惡の殖えたことは甚しい。是等を減少してゆくには、どうしても宗教家の力を假らねばならぬ。トコロで予は固より耶蘇教でもなく、佛教でもなく、まして何宗何派をどうするといふことはない。

予の事は先づ別として、社會全體に對してはどうしても宗教の力を借らねばならぬ。しかるに今日政府は宗教と教育との間に城壁を築いて、宗教をして一步も教育界に立ち入らせぬことにした。ソコデ小學より中學、大學に至るまで、教育を受ける者は少しも宗教の感化を受けぬ。完全の智徳を發達させるには、家庭が大切であるが、家庭の中で最も大切な婦人はどうかといふと、是れ亦宗教の感化を受けぬ。僅に眞宗の信徒の老婆が陳腐の信仰を保つて居ると、耶蘇教が少々ばかり女學校で宗教の感化を與ふるばかりで、全國婦人の九分以上は丸く無宗教者であるでないか。斯る有様でどうして完全なる新國民を造り出されうか。しかるに各宗の僧侶達が此に心附かず、飽くまで從來の筆法を守り、堂塔伽藍や、法衣法器しやうりの莊

嚴ごんで俗眼を眩惑し、牽強附會けんきやうくわいの法談ばかりをして、狂瀾を既に倒るるに挽かへさんと、死物狂ひをやつて居るのは、實に抱腹絶倒イヤ實に憫笑の至に堪へぬ。幸に貴僧達は西洋の學問も少々は修めて、世界の大勢も略分だつつて居ることであるから、今日の滔々たる腐れ坊主を相手にせず、斷然と手を拂つて飛び出し、一意専心に社會の活布教に従事して貰ひたい。それには從來の舊思想迷信の檀家が何といはふが、寺院が立ち腐れにならふが、そんな事に一切貪着せずドシドシ布教をやる、その内にも新國民の母たる婦人傳道に全力を盡くして貰ひたい。どうかなる事ならば予が生きて居る中に其成績を見るとは出来まいか。どうぞ予の存生中に一つ思ひきつて遣りなさつてはどうだと、熱涙を流して懇々依頼せられたことがある。新新様な處

を見ると、翁は嘗に佛教破壊主義でもなく、僧侶滅亡主義でもないのみならず、水門黃門公が領内の墮落僧を放逐し、淫祠邪教の寺院を毀こぼちて、眞正の僧侶を引き立て、眞正の佛教を發揮しやうとしたと同一の希望であつた。世間では大いに翁を誤解して、猥りに攻撃するものがあるから、チヨット一言雪冤をした。

○舊組織を打破せよ

さて何時もながら歎しきは佛法の不振である。彼の宗教法案などいふものを出すのは固より不可であるが、それを彼是修正とか否決とかするものも間違つて居る。全躰今の新政府といふものはドウして出来たかといふに、徳川氏をはじめ三百大名を悉くぶち毀し國家の制度を根本から破壊して出来、それから外國より種々の制度文物を

輸入して文明社會を造り出さうとして居るではないか。然るに其の社會の一部分たる佛教ばかり數百年前來の組織を其の儘に維持してゆかうと思ふて、種々の法案などを制して、何とかよい工合に遣つてゆかうとするのは大間違である。これは決して出來得られぬ事である。禪宗の寺に「不許葷酒入山門」と書いた石が建て、あるが、アンナ物は取つてのけて仕舞うがよい。實際酒を飲まぬならばよいけれども、酒を飲み葱なども食ふのであつて見れば何にもならぬ。所謂看板に偽りなしてはなくて偽あるのじやから、先づアンナ物から取つてのけ、その外すべてア、いふ類の實際でない物は残らず取つてのけて、内外偽ない様にして眞實に布教に従事せなければならぬ。國家の政治が衰へ軍備が緩むといふと、外國から攻めて來て戦

争になり、澤山な家屋も毀され人民も殺されて、其の損害は一方ならぬが、宗教の腐敗した結果はそれよりも猶ほ劇しいものである。何故といふに、宗教が腐敗するときは、國民の精神が腐敗して倫理道徳がなくなるから、放蕩邪僻火つけ盜賊人殺しが澤山になる、その人殺しの内にも、生れた子を殺すといふが一番悪い。戦争の結果で人が死ぬるなどは人の目に見えるが、宗教腐敗の結果で人殺しなどのあるのはチョット人の目に付かぬけれども、其の實は戦争より損害が多いのである。今や日本も外の事は段々開明に進んだけれども、獨り宗教だけは昔の儘で、段々腐敗するばかりであるから、國民の徳義心が次第に亡くなつて、盜賊人殺などが段々多くなつて來て居ることは日々の新聞でも分る。かういふ有様であるから、宗教改革

は是非ともやらなければならぬが、その改革は法案とか條例とかいふやうな小刀細工ではゆかぬから、何んでも組織を根本から一變して、丁度王政維新の時に幕府や大名を打毀して新政府を建てたやうに遣らなければならぬ。古の組織を打毀すといふても、別段に寺院や僧侶が亡くなるわけではない。丁度幕府や諸侯を打毀しても人民が亡くなつたのではなく、舊の士族や大名か新しい大臣や華族になつて居ると同様で、今の寺院や僧侶は其の儘で、只その組織を一變して自然の淘汰に任せるのである。そうなると眞正の僧侶はヅンヅンと効績を顯すやうになるから茲に始めて宗教の改革が行はる。彼の「不許葷酒入山門」の建石を取つてのけるといふやうなことはホンの一例であるが、兎に角實用のない形式的の物を飾り建て置くこと

いふやうなことではゆかぬから、ソナ物は一切取つてのけて一々實際に遣らなければならぬ。

湖南詩抄

湖南山田孝道

○登角盤山在伯州一名大仙山。

詩筒瓢酒附童肩。孤杖攀登萬仞巔。莽々雲煙生脚底。此身疑是步虛仙。

湖村曰。帶語僊氣。大狂曰。妙々。

○同歸路分韻得葉。

瓢飲不須杯。陶然紅上頰。曠原日欲斜。吟脚輕於葉。
大狂曰。酷肖管茶山。

○閑適黃樸山號。

不羨大鵬千里搏。黃梅只護一枝安。半規明月堪當燭。幾抹紅霞

可代餐。詩骨全兼竹條瘦。禪心終與露花團。淡然生計常隨分。何識人間行路難。

湖村曰。禪心七字。妙不在迹象之間。○大狂曰。詩脫塵氣。妙。又曰。起得雄偉。

○同

寄跡千尋層疊岑。平生經濟不須金。窓前數幅煙山畫。屋後一張溪水琴。翠竹磨詩々淡泊。白雲擁夢々深沉。半輪除却天邊月。舉示阿誰是此心。

湖村曰。領聯含雲流水注之致。○大狂曰。三四名聯。

○晚秋雜感

光陰何迅速。學業太艱難。諸弟皆衣錦。單身獨素餐。秋深山愈瘦。霜重菊猶殘。無奈此寥落。仰天徒浩歎。

大狂曰。無限感慨。

○客中雜題

飄々逐氣且尋香。楚北齊南自在翔。手裡所携只綴鉢。腰間雖帶也空囊。花情鳥性詩三味。月夕風晨茶一方。淡泊生涯真不惡。百年何恨死他鄉。

大狂曰。宛然賣茶翁口吻。

○新年感懷次懶雲老師見寄歲晚書懷韻

勿々年又改。萬里尙羈棲。爲逐蟲書跡。還遭鳳字題。粉梅侵雪立。黛柳掩煙低。且酌孤樽酒。要令醉到臍。

大狂曰。後聯巧綴。

○冬日偶成

此生幸得染禪緇。何逐利名攀嶮危。三椀護身時啜粥。一篇乘興且裁詩。風穿窓隙香燃急。寒透鼎心茶熟遲。嗟我探頭鑽故紙。

廿年尙未免蠅痴。

大狂曰。此什亦是賣茶口吻。又曰。冬日實况描得妙。

○新年感懷

流水行雲自在身。可憐蠶屈守寒貧。懶眠愁坐將三月。細雨斜風又一春。綿被猶餘王猛虱。玉盤何得陸機尊。斯時誰解斯情者。獨有瓶梅向我嘔。

湖村曰。熟典新活。○大狂曰。僕愛這樣句。

○臘八夜坐

晚冬寒烈透綿袍。打坐殊持意氣豪。消費工夫元妄想。遣除揀擇亦神勞。古龕燈影小於米。幽壑松風大似濤。抽解時推窓戶望。一輪山月吐霜高。

大狂曰。米字妙。

○首夏書事

宿雨全晴風送涼。池頭躑躅放紅光。浮萍濕處蛙排列。斑藓乾邊蟻作行。貪睡靜齋無厭靜。耽吟長日不知長。却憐農父忙々了。刈麥纔終又插秧。

大狂曰。亦是茶山翁口吻。

○春晴

十日長霖晚漸收。晴光好是散詩愁。半弓暖圃青方秀。一髮春山翠欲流。古渡船高知水漲。垂柳烟直判風柔。自今詞客應多事。醉月眠花儘自由。

湖村曰。兩聯寫景。不覺其繁。○大狂曰。尋常風景。一上吾兄筆。何等高妙。

○三緣山觀新綠

雨歇午林含露繁。如山新綠擁山門。鳥藤卓立拭眸望。杜宇一聲烟有痕。

大狂曰。一幅應舉畫。

○送某禪人

故人參飽學林禪。欲訪江山風月邊。脚下元無紅紫線。心頭何有利名纏。落花輕踏雙鞋雪。垂柳斜穿一錫烟。客路春光十分好。不知綴得幾詩篇。

○驟雨

祝融一怒日收明。潑墨溟雲萬里橫。掣電忽疑天柱折。震雷又訝地維傾。却於空際翻銀浪。直向人間散水晶。頃刻晴來多爽氣。梧桐長夏作秋聲。

湖村曰。一氣奔騰。亦如驟雨不崇朝。是學宋詩。而不陷其脆弱纖巧之弊者。殆屬集中上乘。○大狂曰。字勁筆健。一氣呵成。又曰。好詩。東坡之佳處。佩々服々。

○送某禪人歸遠州

長安城裡豈淹留。故海尋盟幾白鷗。一葦飄然衝浪去。月高七十五灘秋。

枕山曰。此首之妙。雖屬東海道。而為九州調者也。○大狂曰。氣象輝燦。

○秋懷

多年牢落宿心違。客舍復逢鴻鴈飛。才短何嗟人事拙。道衰偏歎佛光微。幽香擁夢菊花枕。冷色裊神荷葉衣。日暮寥寥誰共語。推窓獨見岫雲歸。

○觀菊

冷蕊幽香秋意濃。階前最好慰吟胸。一枝橫倒東籬下。學得山僧懶臥容。

枕山曰。僧不學菊。而菊學僧。自是高矣奇矣。○大狂曰。不減郭頻伽一枝臥地便開花。

○夏日雜興以五月新荷綠上衣七字爲未押錄三。

孤村累日熟梅雨。無復一人來叩戶。忽喜新晴雲斂時。入樓涵翠山三五。

枕山曰。三五字面典雅。

○同

斜照揚光檐滴歇。蟬聲漸向槐陰發。半窓茶燭一爐香。占得人間閑日月。

枕山曰。第三句清致不減九老僧也。○湖村曰。晏然而起。截然而歇。

○春晚病起

暖透重袍病漸瘳。孤床兀坐宛詩囚。淹々我已九旬臥。匆々春無三日留。庭際鶉鳴紅彩盡。林間鶯去綠陰稠。柴門何恨欠人訪。好句却宜閑處求。

枕山曰。頭聯妙在韓偓陸游之間。

○春日閑居

翠柳紅花趣有餘。幽窓兀坐意偏舒。閑人自得清閑興。靜讀乾坤無字書。

枕山曰。不立文字之妙趣。約在七字中者也。○大狂曰。此間之意。雖與俗士語。

○送洞嶽禪師罷教授歸信州故山

緇門絕代老禪宗。選佛場中衆競從。忽出檀林抽道骨。却穿蘿逕

逐仙蹤。路遐梅雪寒千里。山濛烟嵐翠萬重。想得月明如鏡夜。神通儘降石潭龍。

○送某禪人卒業歸故山

已建縑門九仞功。又搖金錫向江東。身過柳暗花明外。路入山青雲白中。脚下縱橫添道力。拳頭伸縮現神通。傳聞陬僻妖氛熾。大喝將看佛日紅。

枕山曰。無一字之不穩。無一句之不佳。

○同

曹洞門中真丈夫。凌霜冒雪久忘軀。孤燈已絕三編策。一線方穿九曲珠。活矣禪機龍得水。悠然道貌鳳離梧。知師他日隨緣處。功業應期冠五湖。

枕山曰。僧中亦有方秋巖者歟。○大狂曰。雄偉。

○送某禪人卒業歸與州

多年苦學奏殊勳。今日攝衣辭友群。古鑑磨來渾絕垢。靈機轉得只存筋。六環能掛金峰月。一鉢還收松島雲。奧羽不知人幾許。度生之事獨推君。

枕山曰。七八推之。至矣盡矣。○大狂曰。後聯高妙。

○送賢宗師卒業赴永平寺

羨師脫得算沙群。去向山隅又水濱。已悟千經徒畫餅。寧知萬物是玄文。佛音夜聽龍松雨。祖意晨看虎竹雲。他日功夫成熟處。通身應有異香薰。

枕山曰。通首自覺異香薰矣。○湖村曰。龍松虎竹一聯。匪夷攸思。

○東台懷古

三十餘房擬帝官。一朝兵火盡為空。只留丈六古銅佛。露坐深荆
荒草中。

枕山曰。大佛忽出荊棘。而現於紙上者也。○大狂曰。無限凄絕。又曰。弟酷
好此什。竊為東台詩中第一。他日清書。見贈一本。至囑々々。

○秋夜宿山寺

霜滿寒山月氣清。僧房獨坐太閑生。夜深落葉蕭々下。聽做天花
亂墜聲。

大狂曰。宋詩之絕妙者。全自陸游來。

○某氏園賞菊

秋入東籬霜尚淺。金葩滿地彩光鮮。休嗤野衲向花拜。此是人間
黃面仙。

湖村曰。好詼諧。○大狂曰。好笑。未經人道。

○牛尾雜詩

古溪如帶隔人間。數里犬雞成別寰。翠竹欄懸千尺岸。白茅屋倚
百尋山。長盈靈液欺春暖。不斷幽雲添晝閑。浴後捲簾無一事。
臥看虹背倦禽還。

湖村曰。可畫。○大狂曰。情景寫得妙。有山水清音。

○同

怪嶂擁屋如仙窟。半夜深霜寒徹骨。乍有瓊林鶴夢醒。一聲鳴破
潭心月。

湖村曰。冷峭。○大狂曰。勁峭。又曰。仙韻。

○諏訪山常盤樓上作

海門百里水雲橫。紀嶺泉山茫不明。却覺風光太奇絕。千帆渾在
半空行。

湖村曰。半空二字。用來駢新。

○晚春遊池上本門寺

古杉喬檜擁危巒。陣々翠嵐吹石壇。春老梵宮少人賽。落花如雨磬聲寒。

湖村曰。結句有色有韻。○大狂曰。此什亦是晚唐。

○池上光明樓席上

飛樓高百尺。縹緲對蒼溟。山靜人無夢。地清泉有靈。雲光橫曲檻。松影落疎櫺。仙客知何處。簫聲隔谷聽。

湖村曰。起得有力。○大狂曰。三四太妙。不讓古人。

○花溪山即事次大狂韻

樹影鬱蒼々。空庭苔色古。香烟冷浣衣。一院松花雨。

湖村曰。冷穠。○大狂曰。清味可掬。

○賀舊藩主耳順

桃臉銀鬚睥似神。悠悠自適養天真。壯臨封國治無比。老撫遺民德有隣。霓旆豹韜歸昨夢。茶烟禪榻了前因。華筵好唱南山壽。瑞靄氤氛籠碧筠。

○遊咲花園

十里郊村路。東風一杖輕。梅姬臨澗笑。松丈倚門迎。人韻詩思澹。境幽茶味清。此間多樂意。流水有琴聲。

湖村曰。此從江西詩派來。而不着痕跡。○大狂曰。姬笑丈迎。好對。

○春夜山寺即事

空林疎雨撲窓紗。無賴狂風入夜加。自笑情根猶未斷。一龕燈火呪梅花。

大狂曰。妙。又曰。如此情根。珍重勿斷。

○和曹洞台灣布教師若生國英師見寄韻

人生失意多。海內知音少。捲箔對青山。雲端度歸鳥。

○松江金華山呈永平悟山禪師

金華峰聳碧雲湖。濤影嵐光展畫圖。天半忽聞金錫響。萬家齊仰白毫孤。碧雲湖名。

湖村曰。亦是集中佳製。○大狂曰。莊嚴。可以題六湛老漢之頂相。又曰。金華碧雲。為道兄之耐久朋。豈嘆無知音底。

○遊瑞光山清水寺寺有一燈。自大銅元年。至今不絕焰。

孤筇來上瑞光巔。超脫真疑絕世緣。寶閣凌雲三百仞。靈燈照地一千年。桃櫻綴出華藏界。鶯蝶裝成兜率天。多謝大悲功德力。山僧證得五通仙。

湖村曰。前聯有聲格。後聯明麗。綴出裝成四字。便為宋調。○大狂曰。三四

雄渾。五六豔麗。蓋湖南集中得意之什。

○遊清光院

江上訪禪窟。一笑萬峰青。飛嵐染衣袂。寒濤灑窓櫺。移榻長松下。煮茗話性靈。暮鐘時數杵。脫然忘骸形。千燈浮脚底。夜色忽燐々。恍疑上天宇。跌坐捫群星。

湖村曰。飛嵐十字。頗肖雲光松影一聯。回讀不厭。○大狂曰。深人之語。

○贈南條文雄師

奇才夙欲興斯文。十歲探窮古竺墳。孤錫搖來龍動月。雙鞋踏破鷺峯雲。舌端長廣會無比。胸裏汪洋也絕群。佛海衆生悉瞻仰。現身說法獨推君。

大狂曰。龍動月。鷺峯雲。絕好妙對。又曰碩果師小傳。

○題萬照樓

悠然坐斷俗塵侵。新闢高堂錦浦灣。萬疊青山落孤掌。一奩皎月照虛襟。鵝飛檐角振棋勢。潮拍巖根送梵音。更有琴書堪伴侶。不妨觴詠答天心。

大狂曰。三四幽峭。

○歸山偶感

酒痕塵影汚袈裟。落拓十年天一涯。今日歸來舊精舍。月團香澹證梅花。

湖村曰。結句透徹之至。○秋坪曰無瑕白璧。又曰。能言自家之實況。用筆如舌。

○杵築養神館席上作次末松青萍韻

高樓倚檻舉觥杯。滿眼風光甚快哉。忽訝萬騎齊突入。怒潮直奪海門來。

湖村曰。有氣勢。○秋坪曰。壯快之狀。使人如目觀。

○杵築雜詩

海樓迎月對回潮。落日千峰黛色遙。記得房南天一角。招仙閣上聽仙簫。

秋坪曰。渾雅雄深。聲響不迫。一結縹緲。最有神韻。使讀者心在遠。

○送覺證子卒業赴東都

衲僧尙意氣。意氣或少虧。讀書千萬卷。一事不可爲。愛子具文質。螢雪已三期。羽翼今方就。千里忽飛馳。東都賢豪藪。日夕好追隨。又恐多誘惑。一跌難脫羈。學道當失命。喝棒何敢辭。異時若不成。歸來將虎髭。

○鏡浦雜詩

房南一角訪前蹤。山水依然畫意濃。落日鏡湖平不浪。影明天半玉芙蓉。

湖村曰。如觀。

○碓氷途上

火車窗外日將斜。路入碓氷奇景加。萬岳錦楓紅未盡。梢頭更着白氷花。

○鴻臺總寧寺即事

台觀亭邊眼界寬。曉來最好倚闌干。芙蓉一萬三千尺。直自老松枝上看。

滿山新綠壓浮圖。烟草霏々澹欲無。杜宇一聲何處去。東寧江畔雨模糊。

湖村曰。以神韻勝。

○歲晚口占

拂手都門萬丈塵。六環歸卓錦湖濱。地幽歲晚如平日。天暖臘餘猶小春。山月窺牕曾無語。瓶梅侍座自含嚬。此間尤好拈禪版。

參飽空王法味醇。

形山曰。頭聯溫純。腰聯禪機。起承雄健。轉結委靡。

○中秋書懷

打包身是似鹿舟。飄蕩東西幾十州。墨水詠觴空昨夢。錦湖風月又中秋。桂香和露灑衣袂。鵲影飛霜掠檻頭。自笑狂情銷未盡。也吹鐵笛舞潛蚪。

○新年偶成

新年無客訪僧家。兀坐禪心澹似茶。只有梅梢一痕月。暗移疎影

上袈裟。

半城曰。如誦放翁律。

○清光院十勝

天倫曉鐘

殘月在松杪。輕烟罩曉庭。疎鐘時數點。巢鶴夢方醒。

湖村曰。語近韻遠。○形山曰。淡矣。○半城曰。宛然仙境景。

中原春光

階前櫻萬樹。亂發映流霞。現出華藏界。人々證舍那。

形山曰。證得底是何人麼。

君嶽飛嵐

捲簾凭碧檻。君嶽掃蛾眉。這裏無三伏。翠嵐灑衲衣。

形山曰。涼味可掬。

大橋歸帆

落日回潮急。烟光染翠微。千帆如白鷺。總向畫橋飛。

形山曰。如畫。○半城曰。飛字自鷺字來。是之謂脈絡。

龜城暮鴉

孤城高百尺。粉堞碧松間。疎雨斜陽外。栖鴉虹背還。

形山曰。實景畫不如矣。○半城曰。詩々皆如畫。

袖浦漁火

漁簪千萬點。滿浦夜熒々。記得石山夕。臥看飛亂螢。

形山曰。三四詩人弄巧之處。

嫁島夜雨

湖心浮翠黛。小築玉妃祠。夜雨終天淚。松風只自知。

形山曰。如暗含怨情者也。

珠山明月

虛堂人不見。爽氣涵蓬壺。大月松間出。老龍爭寶珠。

形山曰。一二瀟灑。三四雄壯。○半城曰。寄觀々々。

瑞光尖塔

萬峰歸掌上。活畫挂飛檐。紅葉白雲外。瑞光孤塔尖。

形山曰。古名畫手亦可擲筆矣。半城曰。瑞光字白紅白字來。可謂川工。

角盤晴雪

削玉三千丈。崢嶸照眼寒。曉來晴雪處。好作富峰看。

形山曰。松江日本十勝之一也。予十五年前游焉。故知勝概。今誦此佳什。舊游之情。躍如復起。○半城曰。造語逸蕩。加之泊與澹相逢。非復風塵間之想也。嗟可歌也哉。

○送瑞光覺善上人應宗徵赴西京

神足豈容墊僻鄉。果看金錫忽飛揚。知師撥轉靈機處。鴨月嵐花放瑞光。

形山曰。完壁。一結殊妙。

○送本村子行脚

飄然視筆托浮萍。欲訪名山勝水靈。途上若回心眼去。應看天地活丹青。

形山曰。心與天地絕對。則妙盡可悟。

○賀小笹雪外初度

錦湖奇十字曰雪。鬚髮如雪心如鐵。萬鐘利祿付雲烟。罵倒權貴三寸舌。夙嗜丹青又國詩。研精多年幾嘔血。千山萬水筆下生。咳唾成珠光瓔瑯。齡達不惑健更强。好會故舊供佳設。賀頌洋洋春滿堂。人生如此真快絕。誰知此翁養生方。只在一點靈臺潔。

形山曰。末尾一掉。全篇全振。

○巡教雜感

也逐春風出梵關。黃塵漠漠客衣斑。幻身畢竟輕如芥。佛勅由來重似山。雙屐亂峰殘雪裏。孤帆絕海怒濤間。七旬歷遍三州地。始識先賢弘法艱。三州謂伊豫阿波讚岐。

形山曰。真知佛勅之重。則不惜身命。惜身命者。何知古賢之艱難哉。可謂空海得知已於千載之後也。

○賀明鏡山鷲岳透天師轉法輪

研精三十載。參破祖師禪。道眼開明鏡。慈光照一天。拈鎚龍象伏。陞座雨花翻。闔國皆瞻仰。正逢鷲嶺仙。

○送岩佐全如應徵赴步兵二十一聯隊

隊在石見濱田。石見一名硯州。三槐山在濱田。

萬木凋落肅秋霜。洛陽風物屬荒涼。此際天涯羈棲客。遇變何人不斷腸。硯州活衲全如子。掛錫江陵選佛場。忽奉軍令入邊塞。事與心違甚可傷。雖然真俗不要分。隨處只宜奏偉勳。行矣行矣

全如子。別離何須淚紛紛。生死由來雲出沒。虛空未曾損一髮。子若不會山僧言。去問三槐峯頭月。

藍山曰。深人無淺語。湖南老師。臨別訓誨門弟。意至語竭。全如子者。聽之不覺自入。

○送永松實雄應徵赴第十二師團

團在豐前小倉。

鎮西快男兒。道骨自英嶷。參學幾多年。欲展圖南翼。也遇羽檄徵。決意身許國。一笑脫袈裟。戎服忽憑軾。告子有事時。殊功期銘勒。快揮般若刀。須殺心中賊。

藍山曰。真俗畢竟二而非二。脫袈裟。執干戈。亦是活禪機。

○壬寅元旦

春色無憎愛。惠然入碧蘿。客塵初洗淨。萬物自清和。風竹談般若。梅花謁佛陀。何歎來訪少。真味箇中多。

○奉壽吉祥山貫首不老閣下古稀

偉哉法王德。七十更堅強。百鍊身如鐵。一雙眉似霜。吉祥山不老。福壽海無量。佛子齊瞻仰。至心拜瑞光。

形山曰。後聯拈用山號經句。不留痕迹。妙甚。

○壽神光露庵和尚八十一不老山號。碧層樓名。

碧層樓聳碧湖濱。中有高僧暉似神。鶴髮童顏長不老。冰懷玉骨淨無塵。花前說偈三千首。茶外參禪八十春。好會群賓開賀宴。滿庭桃李及佳辰。

形山曰。此詩自後聯成。故豪宕風發。前聯瀟灑。可謂完璧也。

○次韻却寄藍川居士

文壇驍將賦才優。筆陣縱橫誰與儔。雄健直摩蘇陸壘。澹冲應亞謝陶流。欣君荆璧忽相贈。慚我木桃難作酬。方是綠陰幽草節。

何辭詩酒共嬉游。

藍川曰。押韻妥貼。老手々々。

海野秋坪曰。余聞孝師工詩久矣。今而見其一斑。不堪感吟。

逐日見全豹。所企而待也。

丁酉孟冬 秋坪散人

山村半城曰。詩文之業。專門之徒。猶苦其難。今師桑門餘事耳。而造語之妙。結構之奇。雖專門之徒多不及。

敬服々々。

丁亥四月 半城老夫

中村峯南曰。篇々皆脫塵俗。豈爲得於參禪之餘乎。然而無一首帶臭味。敬服。

戊子仲夏 辱知 峯南老夫暴批

森 大狂曰。千丈大愚二老寂去。洞上久絕繚絃。可嘆也。愚竊屬望于湖南老師。不知老師領乎否。

丁酉冬日

大狂拜讀并記

桂 湖村曰。自辛巳至庚子。二十一年間。功用造到。皆在此中。其一聯一偈。亦見真常流注。非外來聲色也。

辛丑孟冬

湖村五妄批

若生形山曰。近來洞上之真風。委靡不振。如文詞者。亦寂寞。可共者甚稀也。獨有湖南氏。幸得強意矣。

癸卯首夏

形山妄批

贈湖南老師

藍川町田柳塘

禪	林	龍	象	姓	名	優
慧	業	三	生	少	匹	儔
向	上	精	神	何	皎	潔
緒	餘	文	字	亦	風	流
花	前	駐	錫	儘	吟	嘯
月	下	敲	門	多	唱	酬
聞	說	襟	懷	寬	似	海
定	知	蓮	社	許	同	游

明治三十六年六月二十五日印刷
明治三十六年六月二十五日發行

定價廿五錢

著者 山田孝道

東京市神田區四紅梅町十番地

發行者 平本正次

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 藤本兼吉

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場



不許
轉載

發行所

東京市神田區四紅梅町十番地
電話本局二千九百九十九番

光融館

光融館出版書籍地方賣所

同福	熊大	博同	廣同	大同	大同	同同	同同	同同	同同	京岡	岐同	同同	同同	名古
井本	分多	島	備後	二阪	六條	五條	油小	三條	二條	都崎	阜			屋
酒品	長甲	積積	洗積	吉金	寶柳	法爲	顯與	出貝	伊郁	其文	永川			
井川	崎斐	善善	心館	善岡	尾文	枝藏	道教	雲葉	藤小	文中	光			東瀨
安太	右次	治支	書支	平淵	文文	法	書書	寺書	書文	堂	堂	堂	堂	書代
兵衛	郎平	店房	店助	堂館	軒館	館院	院院	店院	司堂	堂	堂	堂	店助	

同同	同橫	千同	札弘	仙同	甲松	同長	三水	長富	高小	小金	同福
濱葉	幌前	臺	府本	野條	原岡	山岡	松澤	井			
倉勉	弘有	多振	富今	藤柳	內高	朝西	樋西	目中學	宇宇	宇宇	日平
田強	集隣	田進	泉貴	崎道	藤生	美溫	澤陽	口村	黑田	都宮	都宮
書	書	書	次	書	故	書	大	書	六十	書	源源
店堂	堂	堂	堂	郎店	堂	堂	館店	郎店	平郎	店堂	平平

光融館出版禪學書類

天桂禪師提唱

(三版)

碧岩錄講義

山田孝道師校注

(三版)

禪門法語集

森大狂居士校注

(再版)

續禪門法語集

山田孝道師著

(四版)

普坐 勸禪 坐用 坐禪 儀心 儀記 講義

全一冊 定價二十錢 郵稅四錢

▲和裝帙入全三冊定價貳圓七十錢▲洋裝全一冊定價貳圓貳角五分

洋裝定價一圓五十錢小包洋裝定價八角五分(三十種三十三冊合本凡八百頁)

洋裝定價二圓小包料十五錢(三十種四十一冊合本凡千貳百頁)

荇生國榮師著

(再版)

寒山詩講義

森大狂居士參訂

(三版)

一休和尚全集

禪學編輯局參訂

(再版)

白隱和尚全集

森大狂居士參訂

禪林叢書 第一篇

全

禪林叢書 第二篇

釋宗演師著

寶鏡三昧講義

大內青巒居士著

碧岩錄十則講義

高田道見師著

十玄談講義

江村秀山師著

偽仰要路講義

山田孝道師著

(三版)

證道歌講義

二

和裝 定價四十錢
郵稅六錢

和裝 全一冊三百頁
定價四十錢郵稅六錢

和裝 美本 三百頁
定價四十錢郵稅六錢

和裝、東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目、定價三十五錢郵稅六錢

和裝、居士分燈錄、道元禪師和歌集、法燈國師法語、定價三十五錢 郵稅六錢

(品切)

一冊 定價五十錢
郵稅六錢

全一冊 定價十六錢
郵稅二錢

三

山田孝道師著

(再版)

信心銘講義

東山領禪師著

達磨禪經說通考疏

若生國榮師著

(四版)

通俗活禪談 第一輯

全

(三版)

通俗活禪談 第二輯

禪學合本

四

全一冊 定價十錢 郵稅二錢

美濃大判 全六冊(品切) 定價三四 郵稅卅錢

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

全一冊 定價貳拾五錢 郵稅四錢

第一卷十冊合本五十五錢第二三卷十冊合本七十五錢第四卷十冊合本五十五錢郵稅各十錢

釋宗演師著

(三版)

靜坐のすゝめ

織田得能師著

(再版)

大起信論義記講義

島地默雷師著

(三版)

維摩經講義

大内青巒居士著

(六版)

原人論講義

全

(六版)

般若心經講義

佛說法滅盡經

五

全一冊 定價七十五錢 郵稅八錢

全一冊 定價三十八錢 郵稅四錢

全一冊 定價二十五錢 郵稅四錢

全一冊 定價十五錢 郵稅四錢

釋宗演師著

(再版)

金剛經講義

和一冊裝

定價貳拾錢
郵稅四錢

山田孝道師著

(三版)

佛教すゝめ

全一冊

定價三十錢
郵稅六錢

曹洞在家日課要集

山田孝道師著

學道用心集講義

全一冊

定價三十錢
郵稅四錢

白隱禪師著

(再版)

ねほけの目ごまし

定價六錢
郵稅貳錢

新刊雜著

9/11/38

鷺尾順敬先生著

日佛家人名辭書

全一冊

定價九圓
郵稅五十錢

山田孝道師著

禪門鐵鎚 殺活自在

全一冊

定價貳拾五錢
郵稅四錢

齋藤唯信師著

佛教倫理の大觀

大和綴 全一冊

定價十二錢
郵稅四錢

安部正人編

鐵舟隨筆

全一冊 頗美裝

定價六十錢
郵稅十錢

若生國榮師著

禪學入門 短刀直入

全一冊

近刊

七

釋宗演師著

(再版)

金剛經講義

山田孝道師著

(三版)

佛教すゝめ

曹洞在家日課要集

山田孝道師著

學道用心集講義

白隱禪師著

(再版)

ねほけの目ごまし

新刊雜著

9/11/58

和一冊裝

定價貳拾錢
郵稅四錢

全一冊

定價三十錢
郵稅六錢

定價八錢
郵稅二錢

全一冊

定價三十錢
郵稅四錢

定價六錢
郵稅貳錢

鷺尾順敬先生著

日佛家人名辭書

山田孝道師著

全一冊

定價九圓
郵稅五十錢

禪門鐵鎚 殺活自在

齋藤唯信師著

全一冊

定價貳拾五錢
郵稅四錢

佛教倫理の大觀

安部正人編

大和一冊

定價十二錢
郵稅四錢

鐵舟隨筆

若生國榮師著

全一冊
頗美裝

定價六十錢
郵稅十錢

禪學入門 短刀直入

全一冊

近刊

村上專精先生著

大乘佛說論批判

全一冊 近刊

田中仙樵先生著

茶禪一味

全一冊 近刊

吉生國榮師著

三契講義

全一冊 近刊

村上專精先生口述

信と行

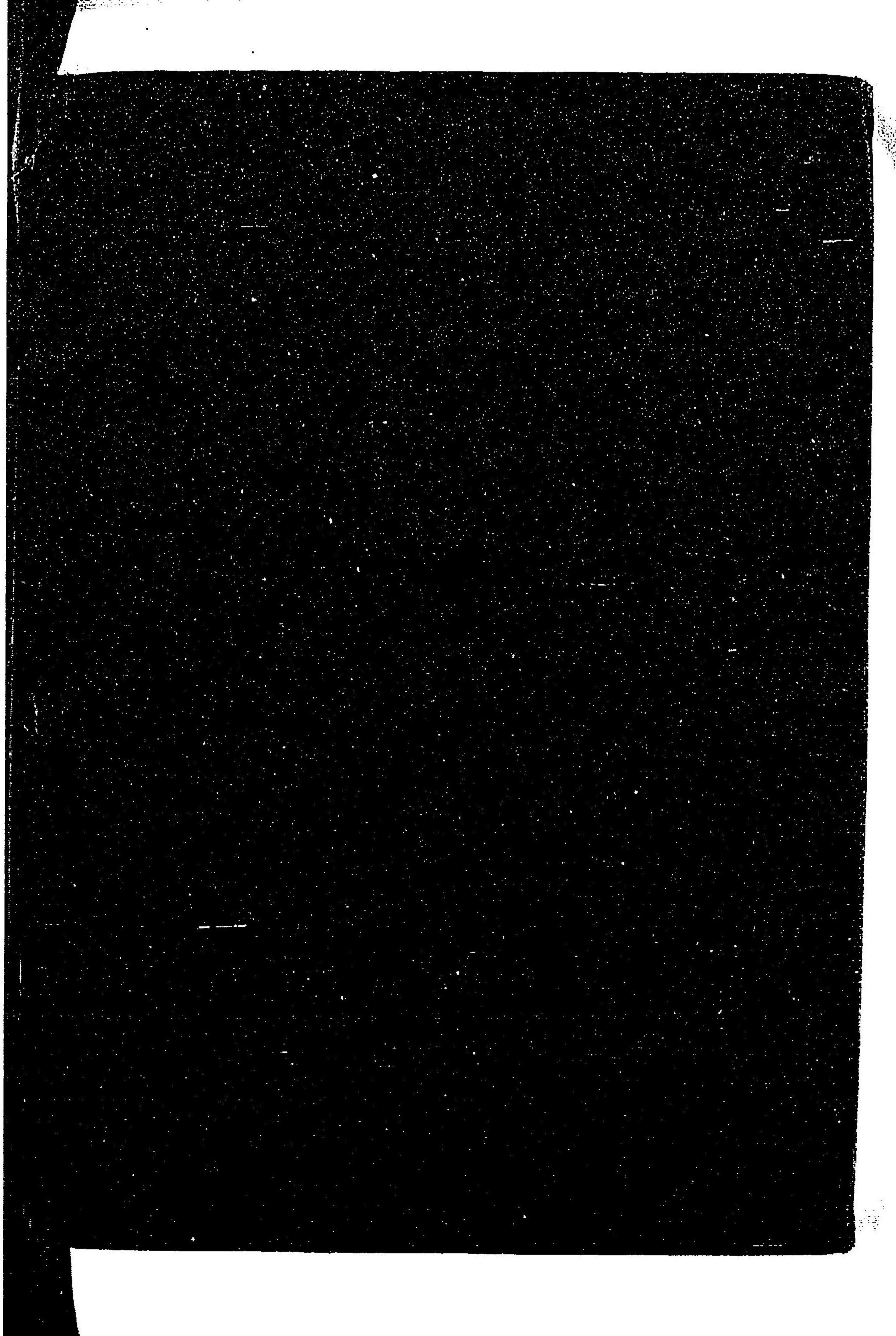
近刊

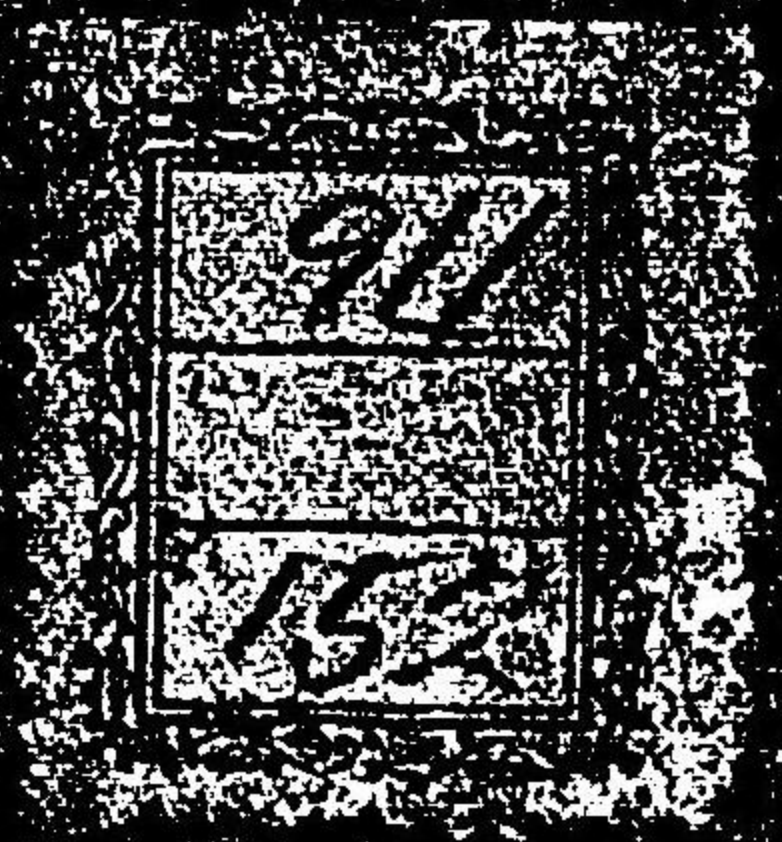
村上專精先生口述

有形と無形

近刊

94
152





019454-000-1

94-152

殺活自在

山田 孝道/著

M36.7

ABG-0167



